

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	465
	雲南地衣類調査行2014(その2) / 原田 浩	465

会員通信 *From Members*

雲南地衣類調査行 2014 (その2)

A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2014 (Part 2) / by Harada H.

>>>>> 原田 浩: 千葉県立中央博物館

昆明到着

4月17日、朝8時半、研究所の王さんチーム6名を載せた車はホテルに着く。私は目の前の食堂で朝食(もちろん米糰)。昆明市を離れ北へ、幹線道路から離れ、金沙江の支流、普渡河(Puduhe, プードゥーフー)の流域を走る。開けた谷を取り囲む丘陵地の斜面を最初の調査地とした(図1)。カシの低木林を抜け、開けた斜面には石灰岩が露出していた。空き地にゴロッと転がったような高さ1mほどの石灰岩には、フジカワゴケ(*Toninia tristis*)が生えていた。日本産のものとは亜種が違つかも。日本なら、安定した露頭で、半日陰の箇所にはしか生えないのだが、ここではかなり日当たりの良い岩上に生えるのだ。このほか、イワノリ科やツブノリ科とみられるラン藻地衣、それとミドリゴケ属 *Endocarpon* などのアナイ

ボゴケ科が見られた。

上に石灰岩露頭が見えたので、カシの低木林をかき分けて上ったのだが、すごくほこりっぽい。枝をよけ



図1. 17日最初の地点(標高2150m)。

るたびに土ほこりが舞い、あまり快適なものではない。

次いで訪れたのは、普渡河。川沿いの石灰岩の岩場では、アナイボゴケ科の痾状地衣を得ることができたが、目立った地衣がないのと、暑いので、早くもあきらめ、道端のトラックで購入したスイカを割って休



図2. 17日2箇所目の調査地となった普渡河の河床（標高1650m）。



図3. 17日3箇所目の地点（標高1650m）。疎林内の岩上にはウメノキゴケ科などが多い。

憩に入っていた。私は念のため、河床の岩上に注目した（図2）。すると、ラン藻地衣を見つけることができた。高知県の四万十川でも、同じような河床の岩上に似たラン藻地衣を見つけたので、その標本と比較するのが楽しみだ。

更に普渡河に沿って下り、これ以上は自動車では走れそうにない地点を3か所目の調査地点とした。川からはずいぶん離れたようだ。カシの疎林の中に小さな岩が裸出している。岩は砂岩で、地衣類相はこれまでの2地点とは全く異なった。まずは灰白色のスミイボゴケ属 *Buellia*。市民研究員の東さんが研究している海岸岩上生の種類に似ていた。ウメノキゴケ科もいくつか見られる（図3）。黄色っぽいのはハマキクバゴケ *Karoolia saxetii* に、灰白色のはオワリウメノキゴケ *Canoparmelia owariensis*（川上他，2012, *Lichenology* 10(2): 181-184 を参照）に似ている。ここも乾燥していて、やはり埃っぽい。

18日も3か所で採集をしたが、そのうち2箇所目を紹介しよう。

保護区とみられる山地の森林を走る道路から、50mほど登った稜線だった。暑く乾燥しているものの、風が吹きわたって気持ち良い地点だ（図5）。背の低いカシを主体とする森林の樹幹にも、岩の上にも地衣類は多い。一方、その先は平らな地形で松が多く



図4. 18日2箇所目(標高 1900m). 岩上のウメノキゴケ科葉状地衣の周り(下?)にゴキブリが多い.



図5. 18日2箇所目. 調査が終り, 風が通る稜線で休憩.

なり, 地衣類はほとんど見られなくなる.

砂岩上のウメノキゴケ科の地衣体には基物から浮いて剥がれやすくなっているものも多かった. そんな所には, 日本では見たことがないようなゴキブリを何匹も目にした. すいぶん乾燥に強そうな風貌をしている(図4).

この日最後の地点は, 雲龍水庫(ダム)に注ぐ小川の河畔だった(図6). 河床を埋めた礫(大きいものでは直径 5m を超える)には, スミイボゴケ属をはじ

めとする様々な地衣類が生えていた. また, 水辺には, 淡水生のアナイボゴケ属, ミドリゴケ属, 更にはミドリサネゴケ属とみられる痾状地衣も見つかった. 日陰側の河畔の縁は多少とも湿った雰囲気があった. 岩上には *Heterodermia boryi* が, クルミの樹幹上にはヒョウモンメダイゴケ属が見つかった. 今回の調査で, ここが最も湿った立地であり, 「Arid Valley」という言葉が当てはまらないようだった. ■

19日の調査は, まず峠を越えた山中だった. せいぜ



図6. 18日3箇所目は, 雲龍水庫に注ぐ小川だった(標高 2100m). 澄んだ水が流れていた.



図7. 19日最初の地点(標高2550m)。カシ (*Quercus spinosa*) が優占する低木林。樹皮上にはウメノキゴケ科の葉状地衣が多い。

い高さ3m程のカシ (*Quercus spinosa*) の低木林(図7)。着生大型地衣は多い。目立ったのは、タナカウメノキゴケかシラチャウメノキゴケ (*Canoparmelia texana* か *C. aptata*)、ヒメキウメノキゴケ属 (*Flavopunctelia soledica*, *F. flaventior*)、タカハシウメノキゴケ (*Hypotrachyna pseudosinuosa*)、ウメノキゴケや、マツゲゴケ、トコブシゴケ属もあった。

タナカウメノキゴケとシラチャウメノキゴケは日本ではかつてはほとんど知られていなかったが、最近で

は暖温帯の桜並木や公園、寺社境内でよく見つかるようになった(山本他, 2010, *Lichenology* 9(1): 31-36)が、天然林内で見られることはまずない、不思議な存在だ。一方、ここ雲南では、森林内でよく見られるのだ。また、ヒメキウメノキゴケ属は長野県でしか見られないし、ウメノキゴケと同所的に生えることはない。しかし雲南では珍しくない。このように、似ているんだけど何か違うというところが面白い。

午後はいよいよ金沙江本流に向かう。(つづく)

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102号 378ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

● *Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 125, pp. 465-468: eds. Kinoshita K., Komine M. & Harada H., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 20 May 2014.

日本地衣学会ニュースレター 125号

発行日: 2014年 5月20日

編集: 木下 薫・小峰 正史・原田 浩

発行者・発行所: 日本地衣学会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35

関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科

微生物工学研究室

©2014 日本地衣学会 (©2014 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。